

論 說

學生・學校・學問

——講演速記抄——

大 熊 信 行

お刷りになつてあります豫定表の中では、昨日の朝私がお話をする順番であつたのでありますが、それをお願いして振り換へて載きまして、いま立ちましたが、私は大熊であります。今朝は大体「人間の力」といふ題でお話を致したいと思ひます。しかし話の始めの方では學校生活に關することを申し上げたいと思ひます。

學校といふものは一つの教育制度であります。今日の日本の學校制度は西洋の學校制度を攝取したものといつてよいと思ひますが、しからば學校以外に教育の制度はあるかと申しますといふと、もとよりあるのであります。たゞこれは簡單に制度といふ意味で存するかどうかは別であります。その第一は家であります。すなはち家庭教育であります。この家庭に於ける教育の意義は今日といへども少しも減殺されてをらないのであります。まだこのほかに教育の機關としては寺院がありました。昔の寺小屋がさうであります。ことに世界を通じてもつとも古い歴史を有する教育制度は徒弟制度であらうと思ひます。アプレンテスシツプの制度であります。今日でも我々の日常生活に觸れて目にとまるものが幾つもあります。——たとへば床屋とか、大工、石屋の如きは今日でも大方この制度をもつてをります。徒弟奉公といふのがそれであります。西洋に於ける大學即ちユニヴァーシティーはもと僧侶を養成するにあつたのであります。大學制度が樹立される場合にも、矢張り古い教育制度である徒弟制度といふものが参考にされたやうに考へられる節があるのであります。

本校には教育行政専攻の高木教授もをられますが、私が携はつてゐる研究範圍の本を讀んでみてもさうであります。昔の遺物として今日迄も西洋の古い大學では坊さんの風俗が残つてをります。いはゆるガウンは日本でいへば衣でありませうが、これを總長始め教授も着る。私は暫くロンドン大學にゐたことがあります、あそこでも古い大學の例をとり入れて教授が教壇に立つ時には背廣に一寸ガウンを引つ掛けて參るのであります。またケンブリッジやオックスフォードの學生生活を見ても、帽子は冠つてをりませんが、有名なあのフランネルのズボンに茶色の上衣を着て、これもまた僧侶の風俗の遺物であると思はれる黒い布呂敷のやうなものを一寸引掛けてゐるのであります。日本では私立大學の總長などが式日にガウンを着て式場に出るところもありますが、これも西洋の模倣でありませう。また専門學校の外人教師などで式日にはガウンを着て出る人なども今日あります。話が横道に入りましたが、そんなわけで西洋では大學の起源は僧侶の養成にあつたのであります。それが發達して諸般の學問を教授するに至つて、卒業生の肩書にマスター・オブ・アーツといふものが附くやうになつた。この意味は技術の親方といふ意味でありますから、言葉も徒弟制度そのものを採つてゐると思はれる。徒弟制度は七年の年期を置いたのでありますが、それと同じく大學の年期も七年といふことになつてをりました。日本におきましては高等學校、大學を通じて七年の年限であつた時代もあるのであります。さういふ譯で徒弟制度といふものはある意味におきましては近代の教育制度の基礎たるべきものをその中に相當に含んでゐると思ふのであります。これが今日の學校制度になりますと全く様子が異つて參るのであります。

一體、教育の制度として徒弟制度と學校制度の違ふところはどうか。一言でこれを申しますならば、徒弟制度は働きつゝ學ぶのであります。それに對して學校制度は働かずして専ら學ぶのであります。左様にいふことが出来ると思ひます。然しながら誤解のないやうに註釋を致しますと、働きつゝ學ぶ者といふのは苦學して牛乳配達をやるとか、新聞配達をしてしかも學校に通學するといふのではない。これは將來牛乳屋とか新聞屋になるのではない。徒弟制度は同じ系統の仕事をやつゝそれを學ぶのでありますから、これは誠に無駄のない能率的な教育制度だといふことになります。これに反して學校教育は、活動の部署についてはどういふ仕事が待つてをるかといふことが明瞭でない。學校生活といふ

ものの中に閉籠められて専ら學ぶのでありますから、一旦世の中に出て一定の活動の部署についた時に、それがどういふ風に役に立つか役に立たないかといふことの判斷力を諸君は持つてをられないのであります。したがつて學科を學ぶ場合の諸君の態度の中には、先生の採点が甘い辛いといふやうなことが鋭敏に感じられるのみであります。また一生懸命やつてをることが果して役に立つことであるか、役に立たないことであるか、必要のことであるか、必要でないことであるかといふ判斷の標準といふものも諸君は持つてをられないといはなくてはならぬ。これは一面から申して近代の學校教育の不利なる點、——缺點とは申しませんが、まあ少くとも一面の短所であらうかと思ひます。したがつて現在の學校教育の制度を改造する方法については、一部の識者は夙に卒業後もう一遍學校に引き返すか、或は在學中のある期間實社會で働くといふ遣り方を提唱してゐるのであります。このことは近年日本でも二三の方面から提唱せられ、また軍事教育におきましては陸海軍の指導者の養成といふやうなことについては、夙にこのやうな制度が徹底的に行はれてをすることは、諸君も御承知のことであります。

我々は教育制度に關して、今申し上げましたやうな問題の輪郭を豫め承知して、我々自身の學生生活を絶えず反省しなくてはならないと考へるのであります。

さて、この學校で學ぶところのものを一括して學問といふならば、一體この學問とは何であるか。學問といふ言葉は日本では古くからあつた言葉であります。文字だけでいふならば學ぶといふ字と問ふといふ字が結びついたものであります。これと似た言葉で屢々同じ意味に用ひられてをるものに科學といふ言葉があります。日本に於ける學問の意味は生活といふものの實際的な必要、——この必要といふ言葉は深く廣く解するのであります。このことの上に成り立つてをつたと思ひます。

これに反して近代科學は本來の性質におきましては必ずしも生活の必要といふものと完全に結びついてをらなかつた。それは何よりも先に知識であります。事物に關する眞實の知識を捉へることであるが、然も事物に關した眞實の知識といふものは一定の方法を以てしなくては捉へ難いものである。然るに自然及び人生の凡ゆる部面に亘る知識を探求する場合

それが唯一つの方法では得られないといふところから、近代科學の方法論なるものが説かれて來てをるのであります。この科學といふ言葉は、誰が譯したか誠に見事な翻譯でありますが、科學の科といひますと、例へば植物學ならば薔薇科といへば薔薇や林檎が入る、さういふ分類的な意味を持つてゐる。すなはち近代科學は各々の部門に於て或る分科の研究に携はるといふ運命を持つてゐるといふことが、この譯語の中に示されてをるのであります。

かうした科學は個々別々のまゝでは人間生活に役立つかどうかわからない。況んや科學の二三のものだけの知識によつて我々の生活を指導しようとするならば、恐らくは誤謬に陥らんとも限らない。近代科學は人間生活の全体の基礎に於てそれを認識する力を持つたものでない。そこで人間生活に於ける「學問」の立場を維持しつゝ、近代科學の立場を學ぶことが必要なのであつて、凡ゆる知識と知識との關聯の問題を見失つてはいけません。

明治以後、我々の學問は西洋科學の攝取によつて或る種の混亂を來たしてをります。その混亂は完全に整理せられたわけではないが、最惡の状態は去つた。さういふ状態に今我々はをると思ふのでありますが、今、我々が生活そのものの立場を見失はず、近代の西洋科學を攝取する態度といふものを検討しますと、その中には二つのものがあると思ひます。

一つは合理性、他の一つは實證性でありますが、この二つは必ずしも二つといふべきではなう。一つであつて然も二つの現れである。この中、第一の合理性とは何か。

大体、學問の本來の目的は事物を單純化するにあると私は考へてをるのであります。聊か普通の見解とは反對の見解をとつてをるやうでありますが、この合理性といふものを然らばどう解釋するか。今申し上げたやうに單純化して考へて見ると、更にこれは二つに分けられると思ふ。その一つは凡そ事物の性質を捉へようとする時の所謂因果論的認識、——因果關係的に自然現象を見る態度。然も慎重に凡ゆる條件を考慮しながら事物の因果關係を捉へようとする認識がすなはち合理的認識であります。

然しながらもう一つある。この後の方は屢々忘れられてゐるのではないかと思ふのでありますが、その一つとは目的論的認識であります。なほ凡ゆる行動、凡ゆる活動といふものが常に一定の目的との關係に於て理解される。目的と手

段との關係において生活活動を理解するといふ態度がすなはち合理精神であります。従つてこの合理精神には二つの面があります。一つは因果論的のもの、自然科學的のもの、もう一つは精神科學的のもの、或は精神科學的目的論の面であります。これらのものを我々は生活者の立場に於て捉へなくてはならない。その研究態度の根本は生きて行くものの立場であるといふことになります。現實にはこれは國民生活の立場を離れては有り得ない。また實證精神はこれを切りつめていふならば、自分の理想、觀念、從來の考へ方、自分の希望といふやうなものに捉はれないで、希望、願望といふものから離れて、事物或は生活の事態そのものをありのまゝに正面から見ようとする精神であります。

人は往々にして、或は常にものを見る時、自分の希望といふものを翳めて見るために、正しい認識をなし得ないことが多い。しかるに希望や願望や理想に倚るのではなく、左様なものは暫く措いて、現實の姿の有りのまゝを直視する精神、これがすなはち實證精神であると思ふのであります。近代の日本の發展は、この根本の二つの精神、究極に於ては一つであるが、この科學精神を離れては有り得なかつたと思ふ。

いかに客觀的な、人間の願望を入れないところの、あるものがあるがまゝに見るところの研究に屬するものでも、主体性を潜めてをるか、——私が駭きを以て經驗したことの一例を申し上げますと、十年前、ロンドンにゐました時、或る日、泊つてゐたホテルの客と一緒にリーゼンツパーク——ロンドンの町の中にある公園ですが、その公園へ私は散歩に行つた。すると靜かな散歩路の曲り角にペンキで書いた地圖が出てゐました。それは世界地圖であつたのでありますが一足先に私の前を歩いて行つたお婆さんと娘の二人連が、私をかへりみて、「貴方の國は何といふ世界の外れでせう」といふ風なことをいひました。私も地圖の前に立つて、始めて熟々とその世界地圖を見たことですが、こゝには地理學專攻の小寺教授もゐられますが、私はイギリスの地理の教科書を見た譯ではありませんが、その公園のペンキ塗りの世界地圖を見て駭いたのは、成る程、日本は世界の果にあるといふことであります。

黑板がないから書けません、こゝに地球儀があると致しますと、イギリス本國を眞中にして向ふの方からかう切る、すなはちその公園の地圖はイギリス本國を世界の眞中に置いた構造を持つたものであります。従つてアメリカは、諸

君の方から見れば此方側で、極東の日本は地圖全体から云ひますと此方の外れであります。それもほんのちよつぴりと間に合せて描いてある。

私は茫然として見てゐましたが、私がこの世界地圖を見て實感致しましたことは、自分は今イギリスにをる、日本は遙かに遠いところにあるといふことであります。ところが、普通のイギリス人は世界の地圖はみなかういふものである、これ以外に地圖の書き方はないといふ風に思つてゐるかと思はれる。一體イギリス人は自信の強い國民であります。歴史そのものがさういふ風にしたのでありますが、人間は生れながら英語を喋舌るものだといふ位に思つてゐるらしい。それ程の國民でありますから、世界地圖にはこれ以外の構造のものはないとお婆さんが思ふのも當然であります。この地圖のやうなものでさへ、先程申し上げました主体性といふものを、やはりその中に一杯に含めてゐるといふことを私は知つて駭いたのであります。

さて大變話は長くなりましたが、これは本論ではありません。そこで學問を研究致しますものを假に學者といふならば然らばこの學者の活動といふものはどのやうに國々では組織されてをるかといふことを一應考へて見る必要があります。もつとも學問をすることを生涯の仕事にしてゐるものを學者といひますと、それ以外にも事實上の學者は多いのであります。それがどんな風に存在してゐるかといふと現在では學者は先づ教育の制度、つまり學校教育体系といふか、この体系の中に分布してゐるのであります。すなはち一番手つ取り早く一國の學者の活動の状態を捉へようとする場合には、教育体系殊に専門學校以上の教育体系の背後を眺めて、そこに配置されてをる専門家の存在と活動とを見ればいい譯であります。この外、大會社、銀行、官公立の研究所、調査部といふやうなところにも事實上の學者がゐる仕事をやつてをります。また新聞や雜誌、所謂デヤアナリズムの機構の中にも、優秀な學者がをるのであります。然し一國の學者の研究と、存在の仕方といふものを概観しようとする場合に、第一に見なくてはならないものは、今申し上げたやうに、一國の教育体系、殊に専門學校大學に配置されてをる教員の活動であります。勿論この外にも民間には所謂民間學者といふものがあるつて、環境に恵まれた人は各方面の研究をやつてをる譯であります。これを國家の見地からいへば、何が重要か、何が何

時必要であるかといふ原理によつて、一國學者の全部が云はゞ或る目的を以て統一されてゐるとはいひ難いのであります。今日この戦時下に於きましては日本の學者の學問的活動といふものは、次第にこの方向に集中されつゝあるのみならず、企畫院の科學部は昨秋來着々これに着手してその豫定通り四月に入つてから科學動員の仕事に着手してをります。文部省の如きでも全國の専門學校、大學の教員の研究題目、研究的活動の狀況を調査致してをりますが、恐らくは近い將來に於きましては一國の學者の研究題目がもつと企畫せられた狀態に統制せられる時が來るのではないかと思ひます。しかし現今までの一國全體の學者の活動狀況、その學問研究といふものは、自然的に分布されてゐるに止まるのであります。

さて、學校教員は一方では教員としての面と、他方では研究者の面と、この兩面を持つてゐるといふのが實際の狀態であります。その中教育者としての面を考へますといふと——寧ろ問題を轉じまして學校に於ける教育の方法の問題といふことを考へて見ますといふと、學問を中心としての教育の方法はこれを大きく分けますと講義と研究指導であると思ひます。本校の學科課程を見ますといふと科目の中に研究指導といふものがありますが、これは嚴密に申して一つの科目ではない。何の科目に就て何を研究し、何を指導するかといふことは何も書いてはありません。それから見ましてもこれは違つたものであります。

今日の學校教育に於ける教育の方法といふものは寧ろ時間の配當からいへば釣合が採れてをらないが、講義と研究指導（他の言葉でいへば演習）といふ二つに分れる。諸君は入學早々であります、學科に關する限り諸君の受けるところの教育は二つの根本形式を持つてをります。一つは講義であり、一つは演習、本校の用語を用ひれば研究指導なのであります。

學問といふ言葉に對して學術といふ言葉がありますが、研究指導の如き方法は單に知識を修得するといふところを越へまして、諸君の智力を鍛鍊する方法であります。左様に私は思ひます。或る戰術に關する専門書の中には學術といふものを嚴密に分けて學は知識である、術はこの知識を眞に人間の能力化すること、この能力の世界が術の世界であるといふ風に説いてをります。その言ひ方を採り入れるといふと、研究指導といふ教育の一方法は、寧ろ術を授けるのであるとい

ふことが出来るのではないかと思ひます。

一體日本語で申します技藝といふもの、——これは武藝その他の遊藝に至る迄の技藝といふものは、師匠をとつて悪い癖を一々直して貰ふのであります。近代の西洋のスポーツも同様であつて、我流といふものは許されない。

學問の世界も同様であつて、我流といふことは矢張許されないにも拘らず、何といつても智能の世界は眼に見えないから諸君は我流におちる。單に學校で學ぶ以外に本を書き、また社會そのものからも直接にものを學びとられるのであります。そこで諸君の頭の中には正規に學ぶ學校教育から入つたものの以外に、色々のものが入つてゐる。不完全な形で間違つて入つたものもあるであらう、誤謬の形で入つたものも頭の中にはあるであらうが、全体としてのそれはどういふ風に歪んでゐるかといふことは一寸分らない状態であるだらうと思ひます。何人にしたところで、完全な校振りを持つた頭腦の人はないと思ひますが、それにしても諸君の頭の中には色々の間違つた考へ方が入り交つてゐる。しかしさういふものは一寸見えない。見えてもそれは捉へ難いのであります。知識の間違ひよりも、もつと根本的な、ものの見方といふやうなものに就ては、正否は分らないのであります。研究指導はかういふものを多少でも捉へ出して、間違つてゐるところは剪り捨てるといふ方法であります。さうでなければならぬ筈であると私は考へてゐるのであります。

また一般の講義におきましては、これは諸君はたゞ聴くといふだけでありますけれども、それに反しまして研究指導の方は、部屋構造からして違つてゐる。諸君はお互ひに見合つてゐるのである。のみならず、教師の方は黙つてゐる、そして諸君自身が討論を戦かすこともあるのであります。これによつて諸君は始めて、自己の實力といふものを自覺するのであります。また自分の實力と他人の實力の距離といふものも計り知ることが出来るのであります。といつて、武藝の如きはその實力の違ひといふものは明かに判るのであります。智能の世界といふものはそのやうには判らない。そこに人間の自惚れといふものも入つて來るのであります。これを距離感の欠乏と私は云ひたいのであります。單に教師と自分との距離感がないだけでなく、お互ひの間の距離感といふものが十分でない。席次によつて誰が何番だといふことだけが判つて果してどれだけの違ひがあるか、相互の知能の距離といふものは明かでないのであります。この点、研究指導は

その距離感といふものを多少とも養成するでありませう。

そこで諸君の問題ではなく、學校の教員といふ立場に復りますといふと、先程も申し上げましたやうに、わたくしどもは二つの面を持つてをるのであります。それは教育者としての生活と、その反面では研究者としての生活であります。この二つの面がどういふ矛盾を含んでをり、また如何に統一されるものであるかといふことを、今日の話のプログラムの中に入れておいたのではあります、大變に話が長くなりましたから、これはまた次の機會に譲らなくてはならないと思ひます。

丁度時間に致しますと四十分近くお話し申し上げましたが、私の豫定では大體に於てこれで半分であります。後半分はもつと内容的なお話をする積りでをります。例へば去る八日堀池校長がお話になつた商人といふ言葉の持つてをる意味、私自身の持つてをる商人といふ言葉に對する疑問、商人の概念に對する私自身の検討なども一言申し上げたいと思つてをります。こゝには校長始め多くの教官の方がをられますので、その機會に私の意見を申し上げたいと思つたのであります、今日は時間がありませんからまた改めてその節に申し上げることに致したいと思ひます。

更に一番冒頭に申し上げました「人間」の力といふ題目であります、これには全く觸れずに話が終りました。これも亦他の機會に申し上げたいと思ひます。諸君の入學勿々の生活訓練の期間中の講話としては最も適當でなかつたかも知れませんが、果してどうか、その点は諸君の判斷に委せたいと思ひます。

追記。この講演の續きは速記が取つてなかつたので、この部分だけ載せることにした。讀んでみると。大變まとまりのわるいものであるが、隨想の寄せ集めとして見ていたゞく外ないとおもふ。